

事例3 企業とNPOの協働活動——「Green Gift」プロジェクト

文：日本NPOセンター 丸山佑介



特性を活かした協働の枠組みを全国に

「Green Gift」プロジェクトは、日本NPOセンターが行う環境NPOを応援する事業です。各地方EPOのご協力、環境省の後援、東京海上日動火災保険株式会社（以降、東京海上日動）の協賛を得て実施しています。東京海上日動では、保険契約者が契約手続き時に、ご契約のしおり等を紙ではなくWEBサイト上での閲覧を選択した場合、紙使用量削減額の一部を本プロジェクトに寄付しています。

本プロジェクトの目的は、子どもとご家族が屋外での環境活動への参加を通じて、地域の環境課題に気づききっかけを持つことです。その活動を実施NPOと東京海上日動の社員や代理店、一部では行政も含めた多様なステークホルダーの協働で行うことで新たな層が「ESDの10年」後となるこれからの地域の環境を支える担い手となることを狙いとしています。

実施期間は3年間（2013年10月から2016年9月まで）としており、初年度は全国16カ所、北海道（2カ所）、青森、秋田、千葉、東京、山梨、長野、岐阜、愛知、大阪、奈良、鳥取、高知、熊本、鹿児島にて活動を行いました。各地で年間200名の参加を目標にプログラムを実施しています。

地域をフィールドにつなぎ・広がる

秋田県（特定非営利活動法人秋田パドラーズ主催）では、海岸線のごみ拾いを行いました。ごみ拾いという活動はそれほど珍しいものではありませんが、このごみを材料にアートをつくるプログラムです。子どもたちは、海岸に落ちているさまざまなものをごみではなく「材料」として拾っていくのでそのごみの形状、色、形など気にしながら拾っていきます。海岸沿いに落ちているごみの多くが自然に流れ着いたものではなく、人が投棄したごみ（ドリンク剤のビン、注射器、ビニール片など）であることに気づきました。子どもたちからは「こんなにたくさんのごみが落ちているとは思わなかった」という感想が寄せられました。

また、山梨県（特定非営利活動法人フィールド'21主催）ではお茶摘みの後、お茶を煎り、お茶をいただく作法までを通して体験することで環境に触れながら日本古来の文化も学ぶ機会を持ちました。子どもたちにとって自分たちの暮らす地域にどのような資源があり、その資源が脅威にさらされていることや、便利な環境の中でうっかりすると見落としがちになっていることを体験から気づいたよう

です。

子どもたちだけでなく参加者の大人たちにも学びがあったようです。それは、地域の環境を持続可能にしていくためにはたくさんの出番があることです。このプログラムへの参加をきっかけとして環境保全の担い手として「各々が何ができるのかを考える第一歩になった」と話す参加者もみられました。東京海上日動の社員も、当初は慣れない環境活動への関わり方や、環境NPOとの協働に戸惑っていましたが、少しずつ積極的に参加するメンバーも増えてきています。こうして、地域の自然環境に興味を持ち、参加者から当事者へと変わっていくことがこのプロジェクトの目指すところです。

「ESDの10年」後、この理念を継承して、持続可能な地域の担い手を育てる可能性を持ったこのプロジェクトの今後の展開にもご注目ください。



秋田県雄物川河口付近の海岸線にてごみ拾いを終えた参加者たち

丸山 佑介（まるやま ゆうすけ）

日本NPOセンター企画部門スタッフ。新潟県出身。学生時代に社会教育、生涯学習を専攻しながら、地域づくりの分野で活動。卒業後は株式会社リクルートで営業職に就き、2010年よりNPO分野へ。岩手県で地域づくりNPOの風・波デザインでの活動(途中、東日本大震災での復興支援活動にも関わる)を行いながら時限を決めた活動を全うし会員総意で団体を解散。後に現職に至る。